

日本手話を活用した実践事例集

～ 日本手話を活用した指導の充実のために3 ～

北海道教育委員会
平成27年3月

本実践事例集を活用するに当たって

- ・本実践事例集は、関係特別支援学校から提供を受けた事例をもとに、「日本手話を活用した指導の充実のために2」（平成26年3月）で示した考え方に基づき解説を加えたものです。
- ・「日本手話を活用した指導の充実のために2」の巻末に綴じ込んで、御活用ください。
- ・本実践事例集は、左ページを指導案ページ、右ページを解説ページとなるよう見開き印刷にして御活用ください。
- ・展開案の様式や文言については、基本的に事例提供校のものを尊重して編集しています。
- ・「POINT」欄は、各事例を総合的に解説したものです。
- ・指導案ページ（左ページ）のマーカ一部分は、解説ページ（右ページ）の吹き出しの解説部分と対応しています。

各事例の概要について

事例1

小学部第2学年国語

(P 1～6)

指導計画の作成の工夫について、日本手話の効果的な活用と書き言葉の定着に係る指導計画の作成に焦点を当て、解説を行いました。

- ・日本手話の専門性の向上及び指導計画の改善について
- ・日本語による理解の促進について
- ・授業展開の工夫について
- ・板書や掲示の工夫について
- ・効果的な宿題の出し方について

事例2

中学部第3学年国語

(P 7～12)

日本手話による言語活動の充実によって内容の理解を促進するとともに、日本語の書き言葉の理解や我が国の言語文化の理解を促進することの必要性に焦点を当て、解説を行いました。

- ・我が国の言語文化を享受し継承・発展させるために必要な古典に親しむ態度の育成について
- ・板書の工夫（記号の活用）について
- ・事前の正しい手話表現の確認について

事例3

小学部第5学年理科

(P 13～18)

教育的ニーズや主たるコミュニケーション手段の異なる児童が同じ授業を受ける際に必要となる工夫（日本手話の活用及び教材の工夫）について焦点を当て、解説を行いました。

- ・指導の意図に沿った教材の工夫について
- ・児童同士が互いに伝え合うための話し合いの工夫について
- ・写像性のある日本手話の特徴を生かした伝え合いの工夫について

事例4

中学部第3学年理科

(P 19～26)

評価方法の工夫及び指導内容の精選、系統性のある指導計画の工夫について焦点を当て、解説を行いました。

- ・前後の指導内容や他の単元、他の教科等の学習内容との関連性について
- ・日本手話の活用による概念形成と書き言葉による整理の必要性について
- ・学習内容を意図的に扱うための授業展開の方法（例）について

事例1

児童1名が在籍する小学部第2学年の学級の国語科の授業で、日本手話を活用しながら児童の理解の程度を正確に把握するとともに、児童の実態を踏まえた意図的な言葉かけや働きかけを行う授業の展開を工夫することによって、児童の思考を促し、教科の目標を達成した事例

A聾学校小学部第2学年国語科学習指導案

- 1 単元名 本は友だち
教材名 「黄色いバケツ」 (光村図書 国語 2年上「たんぼぼ」)

2 単元設定の理由

本単元は、読書が生活に潤いを与え、今後の人生において役立つのだということを児童が実感し、積極的に読書しようとする意欲を育むことをねらいとして設定している。児童が本単元を通して得た考え方や価値観によって、人間的にも成長していくことを期待している。

本学級の在籍児童は1名であり、普段は指導者と1対1で授業を行っている。そのため、児童の実態に応じてきめ細かな指導を行うことができる一方で、児童同士の伝え合いの場面を設定することが難しく、通常、授業は指導者と児童1名の発言で展開される。指導者としては、児童自身の実態や理解の程度をきめ細かく把握しながら、児童の理解の状況に応じた言葉かけを行うとともに、児童の思考をより促すことのできる発問について工夫することにより、児童の読んでみたいという意欲や、児童の思考力を高めていきたいと考えている。そのためにも、本教材においては、登場人物の行動やその背景にある心情を本文中の言葉とともに理解させながら、登場人物であるきつねの子どもがどのような人物であるかについて考えさせたいと考えている。また、本単元を通して身に付けた力をもとに、おもしろいと思った本を他学級の友達に紹介したいという意欲につなげていきたいと考えている。

3 指導計画 (13時間計画)

- ①物語のおおまかな流れをつかむ。 5時間
- ②物語の好きなどころ、よかったところをノートにメモする。 1時間
- ③きつねの子どもに手紙を書く。 1時間 [本時]
- ④「お話の国の友だち」に紹介されている本の表紙に描かれた登場人物を見て、読んでみたい本を選ぶ。
. 1時間
- ⑤気に入ったところや登場人物に伝えたいことをメモする。 1時間
- ⑥紹介文を書き、発表する。 4時間

4 児童の実態

(1) 学級の実態

本学級は、在籍児童が一人であるため、授業においては、指導者が児童の実態に応じた適切な発問やかかわりができる状況にあるが、児童の興味や実態に応じて授業を展開することができる反面、友達の考えや意見を聞く時間を設定することができないことから、児童の意見を発展させたり、深めたりすることが難しい。

そのため、他学級との合同の授業を意図的に設定するとともに、授業以外の場面においても、他学級の児童と積極的にかかわることができるよう、言葉かけを行ったりかかわる機会を意図的に設定したりするなどの工夫を行っている。このような取組を通して、自分の考えや思いについて自信をもって伝える機会にするとともに、伝え合う楽しさや喜びを味わわせたいと考えている。そして、時には指導者も学習活動を行う一人のメンバーとして、児童の思考を促す発言を意図的に行いたいと考えている。

(2) 児童の実態

児童は、家庭においては日本手話で生活している。日本語に対して苦手意識を感じているものの、授業には意欲的に取り組んでおり、指導者の発問の意味や意図が理解できれば、積極的に自分の考えを発言することができる。

児童は、教科書の本文を読み、自分なりに理解しようとしているが、意味を十分理解していなかったり、誤って捉えていたりしていることも多いため、児童の理解の状況について確認しながら学習を進めていくことが必要である。

指導者は、児童が授業中に新たに意味を理解した言葉については、事後に生活場面や日記指導などを通して補足し、定着を図り、日本語の習得に積極的に取り組んでいる。

POINT

本道の聾学校では、近年、在籍する幼児児童生徒の障がいの重度・重複化とともに、在籍幼児児童生徒数が減少している傾向にあります。このような傾向の中、幼児児童生徒と指導者が1対1の授業場面が増え、幼児児童生徒同士が伝え合い、深め合う場面を設定することが難しい状況にあることから、指導者は言語活動を充実させるための授業の展開を工夫することが必要です。そのため、指導者は、

- ・事前に幼児児童生徒の実態を的確に把握する
- ・当該単元で取り上げる言語活動や、本時で取り扱う部分的な言語活動について十分検討する
- ・取り上げる言語活動に応じた授業展開を工夫し、幼児児童生徒の思考を深める働きかけを行うなど、意図的な指導を行っていくことが大切です。

解説

日本手話で生活している児童の実態を適切に把握し指導を充実させるためには、指導者の日本手話に係る専門性を高めることが大切です。指導者は、児童の手話表現から児童の思いや考えなどを正しく捉えるとともに、指導意図を児童に正しく伝えることができるよう日本手話に係る専門的な知識技能を身に付けることが必要です。

また、指導者は、表現や反応などから児童の理解の状況を把握するとともに、前時までの目標の達成状況などを踏まえ、指導計画を修正したり、配慮事項を加えたりしながら、指導計画を改善していくことが大切です。

実態把握の再検討

- ・本時の目標の検討・修正
- ・本時の学習内容に対する興味関心
- ・日本語の習得状況や新出語いの定着状況など

指導計画（本時案）の改善・工夫 （日本手話活用の工夫）

- ・効率的・効果的な発問及び手話表現の工夫
- ・日本手話を活用して伝え合う内容と書き言葉で確認する内容の整理

前時までの目標の達成状況

- ・指導内容の理解の状況
- ・教科書本文の理解の状況
- ・新出語句の定着の状況 など

指導計画（本時案）の改善・工夫 （部分的な言語活動の検討）

- ・目標を達成するために必要な言語活動（部分的な言語活動）の設定
- ・予想される反応や発言などの整理
- ・理解の状況に応じた言葉かけなどの工夫
- ・思考を深めるための発問等の工夫

本時案（授業展開）の実施

解説

日本手話を活用して授業を展開する際には、日本語による理解が促されているかという視点で評価を行うことが大切です。日本語による理解とは「教科書本文を読んで、正しく内容を理解できる」「理解した内容を、正しい日本語で表現できる」ことなどを指します。

指導者は、理解した内容を書き言葉と一致させることはもとより、子どもの理解の状況を確認しながら、日本語の習得を図っていく必要があります。

指導内容と関連し、新たに本時で取り扱った言葉や日本語の言い回しなどについて、場合によっては本時の1単位時間だけでは十分に理解を促すことが難しい場合もあるため、繰り返し使用する場を設定するなどして、定着を図るための工夫が必要です。

5 単元の目標

- ・登場人物の行動から自分の経験を想起し、登場人物の心情や人物像について想像することができる。
- ・登場人物の行動や人物像から物語の紹介文を書くことができる。
- ・紹介文に必要な事柄を理解し、人物の人柄について説明するために必要な情報を集めることができる。

6 評価規準

- ・教材「黄色いバケツ」を読み、登場人物の発言や行動などに興味をもつ。【国語への関心・意欲・態度】
- ・心に残ったこと（好きな場面）を選び紹介文を書いて発表する。【話す・聞く能力】
- ・必要な事柄を捉えながら紹介文を書く。【書く能力】
- ・時や場所、登場人物や出来事に注意して、おおまかな話の流れをつかんでいる。
- ・場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げて読み、きつねの子の気持ちを考えることができる【読む能力】
- ・人柄を表す言葉を理解し生活に取り入れようとする。【言語についての知識・理解・技能】

7 本時の目標

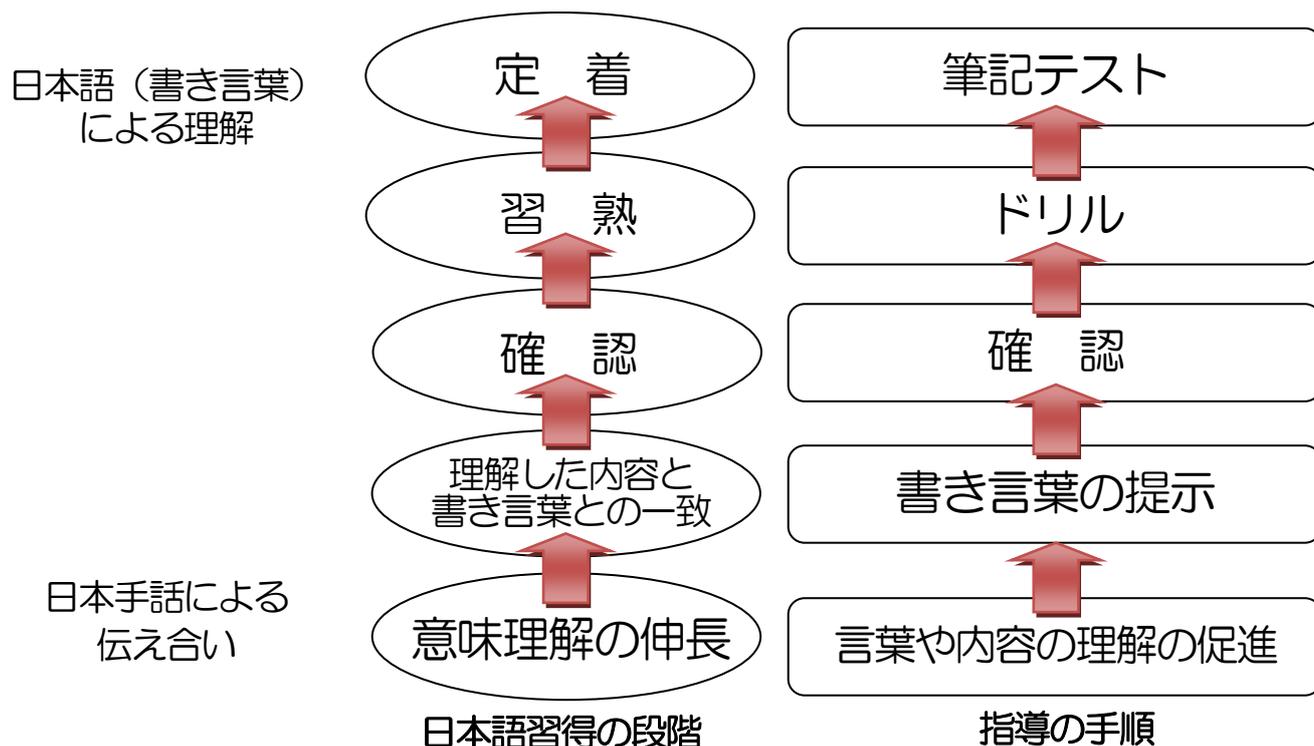
- ・「黄色いバケツ」の好きなところやよかったところを書き抜き、きつねの子どもに伝えたいことや自分の思ったことについて正しく書くことができる。

8 本時の展開

* < >内は日本手話による発問

過程	○主な学習活動・学習内容 ・予想される児童の発言等	・指導者の主な働きかけ △留意事項	■評価規準 □評価方法 ☆障の理解がたのげられた
つかむ (5分)	○課題の提示【板書】 きつねくんに 言ってあげたいことを 手がみに かきましょう。 ・板書を手話読みする。 ○課題の提示【日本手話】 <きつね/指さし/答える/好き/自分/手紙/書く/やる>	・本時の課題を板書する。 ・板書を手話読みするように促す。 △手話読みから、児童が課題を理解しているか把握する。	■本時の課題を正しく理解している。 □正しい表現で手話読みしている。
深める (30分)	○手紙の内容を考える。【日本手話】 ・黄色いバケツがなくなったのに、にこっとわらったり、きっぱり言ったりしてえらかったね。 ・黄色いバケツは、とてもすてきだったね。 ・黄色いバケツが自分のものにならなくて、ざんねんだと思ったけど、きつねくんはちがったね。 ・すごいなと、思ったよ。 ○なぜすごいと思ったか、理由を確認する。【日本手話】	・好きな場面やよかったところを中心に書くことを伝える。 △前時の板書を模造紙に転記し、教室に掲示しておく。 ・何故「すごい」と思ったのか尋ねる。 △友達の持ち物をうらやましいと思った児童の経験を想起させる。 △「黄色いバケツ」のように、友達の物を持って行ってしまったら、持ち主はどう感じるのか確認する。	☆前時のメモを見るように促す。 ■きつねの子どもが、黄色いバケツを自分の物にしたいと思いながらも、持ち主のことを考えていたことに気付いている。

日本手話の活用と書き言葉の定着に向けた指導の方法（例）

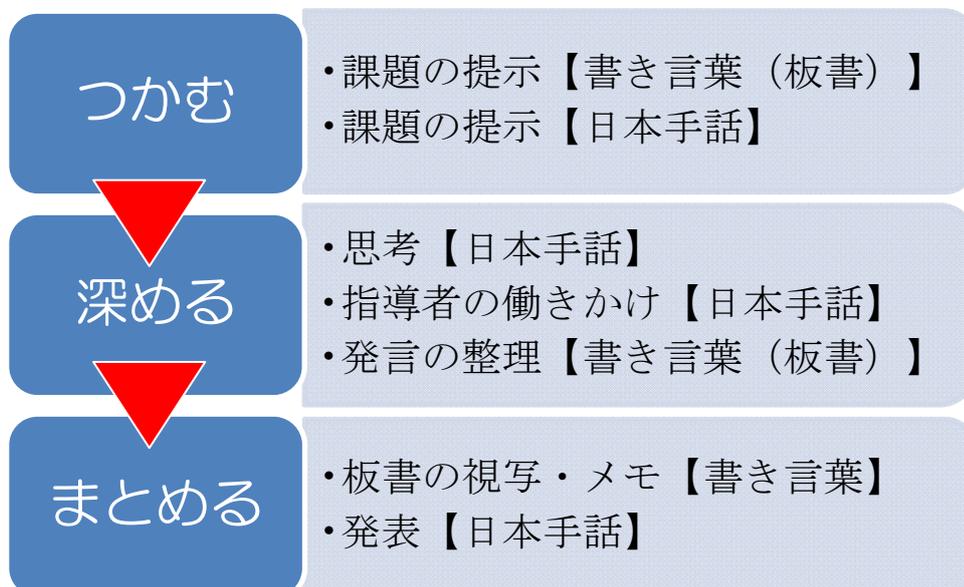


解説

本指導案の例において、『「黄色いバケツ」の好きなところやよかったところを書き抜き、きつねの子どもに伝えたいことや自分の思ったことについて正しく書くことができる。』という本時の目標を達成するためには、児童が指導者の発問の意図を正しく理解し、発問に対して、前時までの学習内容を想起しながら関連付けて思考することが必要です。そのため、1単位時間を有効に活用できるよう授業展開を工夫しながら、「それぞれの学習過程で、何をするのか」について事前に明確に整理しておくことが大切です。

本指導案（本時の展開）では、「つかむ」過程において、在籍児童にとって一番分かりやすいコミュニケーション手段（日本手話）を活用し、時間配分を最小限に留めながらも、児童が指導者の発問に対して、正しく意図を理解できるよう工夫しています。また、「深める」過程においては、日本手話で指導者と伝え合う時間を多く確保することによって、児童がこれまでの指導内容を振り返ったり、思考を深めるための言葉かけを行ったりできるよう工夫しています。

日本手話を活用した授業展開の例



	<ul style="list-style-type: none"> ・黄色いバケツをほしいという気持ちと、もちぬしがこまっているという気持ちの両方があったのかな。 ・ぼくも、友だちのもちものがほしいと思ったことがあるよ。 ・一週間、ずっと黄色いバケツのことを考えていたんだね。 <p>○板書を参考にしながら、手紙を書く。 【書き言葉】 【日本手話】</p>	<p>△児童の発言を認めつつ、表現が不十分な時は、児童の考えや思いが十分表現されるように言葉かけを行い、表現を促す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童の発言を板書する。 <p>△児童の伝えたい内容を確認しながら、正しい書き言葉に置き換えて板書する。</p> <p>△必要に応じて児童に確認し、児童の考えや思いが十分表現されている文となるように留意する。</p>	<p>□児童の手話表現から児童の考えや思いを理解する。</p> <p>☆前時までに扱った登場人物の気持ちの変化や人物について記録した掲示物を確認するよう促す。</p>
<p>まとめ (10分)</p>	<p>きつねくんに 言ってあげたいことを 手がみに かきましよう。 <きつね/指さし/答える/好き/自分/手紙/書く/やる></p>	<p>△児童が書き言葉に苦手意識を感じていることを留意し、書く活動を行う際には十分時間を確保するとともに、必要に応じて励ましながら書くように働きかける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■きつねの子どもに伝えることをイメージしながら書いている。 □ノートに正しく書いているか確認する。 ☆児童の書きたい内容を日本手話で確認しながら、誤った表現や文章については正しい文章となるように修正する。
	<p>手紙を発表しましょう。 <書いた/手紙/発表/お願い></p>	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた手紙を発表するよう促す。 <p>△原稿用紙を用意しておき、手紙を原稿用紙に清書することを宿題にすることで、書き言葉の一層の定着を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■自分の書いた手紙を読みながら、正しく手話表現している。 □児童の手話表現と伝えたい内容が合っているか確認する。

※「本時の評価」について

指導と評価の一体化が大切であることから、事前に検討した評価規準に基づき、授業の中で適切に評価していくことが大切です。このことから、本事例集においても「本時の評価」欄は設けず、本時の展開欄に評価について記入することとしました。

解説

本時の展開において児童の思考を促すためには、児童がこれまでの指導内容について、適宜振り返ることができるようにしておくことが大切です。振り返るための手がかりとして、ノートやワークシートなども有効ですが、板書を掲示物としても残しておき、教室の後方などに掲示しておくことも有効です。指導者が、単元の指導計画を作成する際に、見直しをもちながら板書や掲示の残し方についても工夫しておくことによって、児童の理解を一層促すことができます。

学習内容を掲示として活用した例

指導者の意図的な言葉かけ

ポイントとなる地の文

会話文

児童の発言

黄色いバケツ

金曜日

月曜日

「い
きつ
空が、

「い
よ、もう。」

きつぱり言う
て空を見ました。
も広がっていました。

(略)

の子は、あかんべを
りとして出しました。
ました。

きょうみがある。
ひょうきん
黄色いバケツが、
すきになった。
黄色いバケツ
ほしいと申

もりやま みやこ

▽黄色いバケツをきょういになったのか。
○黄色いバケツは、
心の中にある。

・もう、じゅうぶん
まんぞくした。
・もう、なやまないで
すむ。
・すっきりした。

重要な発言を枠囲みで目立たせている。

解説

日本手話の活用の際には、書き言葉を読んで理解できているかを確認したり、手話表現を正しく書き言葉で表したりすることができるかなどについて、適宜把握し、意図的に指導していく必要があります。

1 単位時間の中で、書き言葉による活動を意図的に組み入れることも必要ですが、十分な時間が確保できない場合には、例えば宿題として書き言葉で確認する課題を出したり、事後に意図的に確認したりする時間を設定することで、より一層定着を図ることができます。

指導者は、児童の学習意欲や負担も考慮した上で、事前に課題の量や内容を検討しておく必要があります。

書き言葉に苦手さを感じている児童に課題を提示する際のポイント

- ・ 課題は、児童が理解している内容を中心にする。
- ・ 授業の中で、意図的に使用した言葉や言い回しを確認するための課題を出す。
- ・ 児童の実態や学習の状況等によっては、キーワードのみ書き込ませたり、記号を選択させたりする課題にする。
- ・ 十分な定着が図られていない場合は、時間をおいて、繰り返し取り組む。
- ・ 取り組んだことには、適切な評価を加え、良かった点や次に頑張る点などを具体的に伝える。 など

事例2

生徒4名が在籍している中学部第3学年の学級の国語科（和歌）の授業で、日本手話を活用しながら、生徒一人一人が感じたことについて、積極的に意見交流を行い、それぞれの感じ方の同じ点や違う点などについて伝え合う活動を通して、自分の考えや集団の考えを発展させた事例

B聾学校中学部第3学年国語科学習指導案

1 単元名 いにしへの心と語らう

教材名 「君待つと——万葉・古今・新古今」（国語3 光村図書）

2 単元について（単元設定の理由）

（1）教材観

本教材は「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」の代表的な作品が扱われ、和歌・古典に親しませることをねらい、設定している。奈良時代の万葉集に始まり、俵万智に代表される現代短歌に至るまで、五・七・五・七・七という和歌の韻律は、日本において変わることなく脈々と続いてきた。五音七音の繰り返しは和歌というジャンルを越えて、標語やキャッチコピー、歌謡曲にも見られる日本語の韻律であり、特徴である。在籍生徒は聴覚に障がいがあるが、国語科の目標を達成させるため、生徒なりに五音七音という日本古来より受け継がれてきた日本語のリズムに触れさせたいと考えている。

また、和歌は、短い音数の中に様々な心情・情景などのイメージが圧縮されて表現されているものである。その省略された部分をどのように読み取るかによって、解釈が変わってくる。本教材で取り扱っている十五首の和歌は、それぞれ自然の風景や男女・親子の愛を詠んだものであるが、その短い言葉から自分なりに情景を想像させ、他の生徒と意見交流することで和歌に描かれた心情や情景に対して理解を深めたいと考えている。短い言葉で表現するため、様々な表現技法も使われているが、その基礎知識も確認しながら学習を進めていきたい。

（2）生徒観

本学級には男子3名、女子1名の計4名が在籍している。生徒は、活発な生徒が多く、自分の興味のあることに対しては様々な考えを積極的に発表することができる。その反面、興味がもてないと、集中を持続させることが難しい傾向がある。理由は、その事柄に関する知識や背景などの基本的情報が不足しているためであると考えている。また、学力に課題がある生徒や家庭学習の習慣が不十分な生徒も在籍していることから、本単元の学習を通して古典に親しみをもち、古典に対する生徒の苦手意識を軽減させるよう配慮しつつ、学習意欲を高めながら基礎的な学習内容の定着を図っていきたいと考えている。

生徒は第2学年時に「短歌」を学習し、第3学年では、これまでに「俳句」を学習してきた。これまでの学習を通して、作者の思いを凝縮させた作品や、ほんの瞬間の風景を切り取ったかのような作品、短い言葉の中に表現された世界を読み味わうことができ、短歌や俳句の楽しさを理解してきた。

一方で、古典の学習に対しては「昔の言葉はわかりにくい。」「意味がわかりづらい。」などと苦手意識を感じている生徒も多い。これは、歴史的仮名遣いや古典特有の表現技法などに関する基礎的な知識が定着していないことや、言語的なことだけでなく歴史的な風習や文化の知識が不足しているためではないかと捉えている。既習事項を振り返るだけでなく、歴史的な背景を確認しながら学習を進めていきたい。

日本手話を積極的に活用することにより、生徒それぞれの感じた内容を伝え合い、深めたいと考えている。また、生徒の実態に応じて日本語の音韻を意識させる場面も設定し、本単元の目標でもある「和歌のリズムを意識」させることも必要であると考えている。

（3）学習観

和歌は本来、心の中の様々な思いを言葉に乗せて表現したものが次第に定型のリズムをもつようになったものであり、自分の心を相手に伝え、相手の心を知ることができる「伝え合う」手段であった。本教材において登場する和歌には、時代は違えども、家族や恋人に対する思いや季節感など、現代に生きる私たちにも共感できる身近なテーマが扱われている作品が多い。生徒たちの経験を引き出し、生徒自身の考えや思いと照らし合わせながら学習を進めるよう展開を工夫することで、生徒の共感も得やすいのではないかと考えている。

和歌が詠まれた時代の特殊性をはじめ現代との相違はあるものの、短い言葉の中に凝縮された古人の思いを感じ取らせ、それぞれの時代に生きた古人たちの思いは現在に受け継がれているのだということを知り、古典に親しみをもちたい。

POINT

言語活動を充実させるためには、指導者は、言語の役割を踏まえ、1単位時間の中で取り上げる言語活動を明確にしながら指導計画を作成することが大切です。例えば、

- ・本文と自分の知識や経験と結び付けて解釈することによって、自分の考えをもつ
- ・自分の考えについて、理由や立場を明確にして説明する

ことなどを通じて、自分の考えを深めていくことが重要となります。また、

- ・他者の考えを認識しつつ自分の考えの前提条件やその適用範囲などを振り返る
- ・他者の考えと比較、分類、関連付けなどを行い、得られた多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味し、自らの考えを深めていく（クリティカルシンキング）

ことが大切です。

そのためには、

- ・集団の中で生徒がそれぞれの考えを表明し合う機会をもつ
- ・様々なものの見方や考えがあることに気付く機会をもつ
- ・それぞれの考えの根拠や前提条件の違い、特徴などをとらえる機会をもつ

ことなどが重要となります。生徒が、それぞれの考えの違いや特徴を確認し合い、整理することを通じて、さらに自分や集団の考えを振り返り、考えを深めることが重要です。

本事例は古典が教材となっていますが、対象となっている生徒は、その当時の時代背景や知識、古典ならではの言い回しなどへの理解が十分ではない実態があります。

一方で、取り上げた和歌の内容は、家族への愛情であったり、別れの寂しさであったりなど、生徒の経験からも想像しやすい身近なものであることから、親しみやすい教材となっています。生徒が和歌を読み、感じ、イメージしたことなどについて、日本手話を積極的に活用し、互いの考えを伝え合うことを通して、生徒自らや学級の考えを深めることができました。

クリティカルシンキングを促すための留意点

①事実等を知識や経験と結び付けて解釈し、自分の考えをもたせるように促す。

②自分の考えについて、探究的な態度をもって意見と根拠、原因と結果などの関係を意識するように促し、説明する際にはそれを明確に示すように働きかける。

③自分の考えと他者の考えの違いをとらえるように働きかけ、それらの妥当性や信頼性を吟味したり、異なる視点から検討したりして振り返るよう促す。

生徒が自分の考えを伝え合うことで、これまでの自分になかった考え方を受け入れて自分の生活に生かしたり、相手の立場や考えを尊重したりすることで自らの考えや集団の考えを発展させていくよう授業を展開する。

解説

古典の指導においては、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導が重視されており、中学校学習指導要領解説国語編においても、「伝統的な言語文化は、創造と継承を繰り返しながら形成されてきた。それらに親しみ、我が国の言語文化を継承し、新たな創造へとつなげていくことができるように内容を構成している。例えば、第1学年では文語のきまりや訓読の仕方を知って音読すること、第2学年では古典に表れたものの見方や考え方に触れること、第3学年では歴史的背景などに注意して古典を読むことなどを取り上げている。」と示されています。

日本手話を活用した古典の指導に際しては、これらについても十分踏まえ、学習指導要領に則った指導を行うことが大切です。

※学習指導要領の関係部分をP10に抜粋しています。

3 単元の目標

- (1) 和歌のリズムを意識して読み、古典の世界に興味や関心をもつ。【国語への関心・意欲・態度】
- (2) 和歌に込められた心情や背景を理解し、昔の人のものの見方や感じ方を捉えることができる。【読むこと】
- (3) 自分の考えと他の考えを交流させることで、更にものの見方や考え方を深める。【話すこと・聞くこと】
- (4) 歴史的仮名遣いや古語の意味を理解する。【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】

4 単元の指導計画 (5時間計画)

- ① 「古今和歌集 仮名序」を読み、和歌についてのイメージをもつ。
- ② 「万葉集」の和歌を音読し、歌に詠まれた情景や古人の心情を読み取る。【本時】
- ③ 「古今和歌集」「新古今和歌集」の和歌を音読し、歌に詠まれた情景や古人の心情を読み取る。
- ④ 和歌に使われている表現技法や、三大和歌集の特徴について確認する。
- ⑤ 本歌取を作成する。

5 評価規準

- ・ 古文を読み、様々な見方で読み味わって自分の意見をもとうとしている。【国語への関心・意欲】
- ・ 類似したテーマの文章等を読み比べるなどして、新しい魅力を知ったり自分の考えを深めたりしている。【読む】
- ・ 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しんでいる。【言語についての知識・理解・技能】

6 本時の目標

- ・ 和歌に込められた心情や背景を理解し、昔の人のものの見方や感じ方を捉えることができる。【読むこと】
- ・ 自分の考えと他の考えを交流させながら、もの見方や考え方を深める。【話すこと・聞くこと】

7 本時の展開

	学習過程	生徒の活動	教師の活動	◇指導上の留意点 ■評価規準
導入 (5分)	本時の課題を確認する	○ノートを参照し、歌に描かれた情景を確認する。 ----- 父母が頭かき撫で幸あれて言ひし言葉せ忘れかねつる ----- ○授業に見通しをもつ。 ----- 【課題】 防人歌に込められた防人たちの思いを考えよう	○前時に読んだ防人歌を提示し、内容を確認する。 ○本時の課題と流れを説明する。	本時全体を通して、指導者は、生徒から出された発言の良い箇所についてその都度伝えたり板書したりしながら、生徒の主体的な発言を促す。
展開 (40分)	防人歌を読み、時代背景を理解する (25分)	----- (1)大君のみことかしくみ磯に触り海原わたる父母を置きて (2)水鳥の立ちの急ぎに父母に物言はず来て今ぞ悔しき (3)韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてそ来にや母なしにして (4)ふたほがみ悪しけ人なりあたゆまひ我がするときに防人に差す ----- ○(1)の歌を読む。 ----- 防人が遠くから来たことが分かる表現を見付ける。 ----- ○(2)の歌を読む。 ----- 「物言わず来た」ことが、なぜ悔しいのか考える。	○防人の歌を提示する。 ・ 地図を用いて場所を確認し、当時の背景を確認する。 【背景】 ・ 赴任地までの距離 ・ 移動手段や所要時間 ・ 道中の危険 など ○「海原わたる」に注目させながら、背景について確認する。日本手話 ○生徒の発言を板書する。書き言葉 ○(2)の歌を読ませる。	※ 4首の歌を順番に黒板に提示する。 ◇生徒の実態に応じて、5・7のリズムに注意して読むよう促す。書き言葉 ※「畏み」が使われた歌の多さを紹介する。 ◇生徒の発言を板書しながら、書き言葉で発言内容を確認する。書き言葉 ■ 当時の背景を捉えて自分の考えをもち、発言することができたか。 ◇生徒の実態に応じて、5・7のリズムに注意して読むよう促す。書き言葉

生涯にわたり、古典に親しむ態度を育てる。

古典のもつリズム

- ・名句・名言の読みや暗唱
- ・五音七音などの特徴を意図的に指導
- ・日本語のもつ音韻を意図的に指導

時代を超えて受け継がれる人の思い

- ・現代の生活や生徒の身近な生活との類似点などを想起
- ・それぞれの生徒の感じたことについて話し合い、深化

意図的な読む活動の実施・指文字の活用

日本手話の活用による言語活動の充実



伝統文化としての日本語の価値に気付く

「伝統的な言語文化に関する事項」中学校学習指導要領

第2章 各教科 第1節 国語 「各学年の目標及び内容」 から引用

第1学年

- (ア) 文語のきまりや訓読の仕方を知り、古文や漢文を音読して、古典特有のリズムを味わいながら、古典の世界に触れること。
- (イ) 古典には様々な種類の作品があることを知ること。

第2学年

- (ア) 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと。
- (イ) 古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること。

第3学年

- (ア) 歴史的背景などに注意して古典を読み、その世界に親しむこと。
- (イ) 古典の一節を引用するなどして、古典に関する簡単な文章を書くこと。

解説

生徒の発言を板書する際には、生徒の発言（日本手話）を正しく読み取ることはもとより、生徒の伝えたい内容や発言の意図について他の生徒が理解しているか確認することが大切です。

生徒の発言を一字一句正確に板書することが大切な場面もありますが、1単位時間のなかで時間を効率的に使い、学習効果を高めるためには、板書の仕方を工夫することも大切です。

聾学校においては、古くから板書による学習効果を高めるための方法として「記号」を活用して指導を行ってきました。記号は、生徒と指導者がお互いの約束の下に成立するものであるため、一人でも多くの人を知っていることが効果的な指導につながります。日本手話を活用した指導においても、書き言葉の定着を図ることが重要であり、効果的・効率的に板書を行うことが指導効果を高めるために有効です。記号を使用する際には、普段から生徒に記号の意味付けを行い、十分生徒の理解を促しながら記号を活用することが大切です。

		<p>○自分たちの身に置き換え、防人の思いを読み取る。</p> <p>○何故、忘れようとしたのだろうか。</p> <p>忘れようとしたものは何か考える。</p> <p>家族／友達／故郷／仕事／ペット</p> <p>【背景】 ・行程の過酷さ ・帰りは自費 ・突然命令が下される</p> <p>・故郷に再び戻れないことを理解する。</p> <p>○防人の境遇について考え、伝え合わせる。 日本手話</p> <p>○(3)の歌を読む。</p> <p>○(3)の歌を読ませる。</p> <p>この歌の「子」についてイメージする。</p> <p>・別れる子どもたちの小ささに気付き、防人の思いを考える。</p> <p>・家庭の事情などを考えずに、防人を選んでいたことを理解する。②</p> <p>○(4)の歌を読む。</p> <p>○(4)の歌を読ませる。</p> <p>「ふたほがみ」とは誰を指すか読み取る。</p> <p>・大君を悪い人だという防人の思いに気付く。</p> <p>○大君を「悪しけ人」と言っていた大丈夫だったのか？</p> <p>○誰に向けて書かれたものかを考えさせる。</p> <p>防人たちの思いについて考える。</p> <p>○自分の考えを理由も併せて発表する。 日本手話</p> <p>・友達の発表を聞き、それに対する自分の考えを述べる。 日本手話</p>	<p>◇「今ぞ」に着目させ、特別な別れとなっていることに気付かせる。</p> <p>◇生徒の発言を適宜板書する。</p> <p>◇意見が深まるように、適宜生徒の発言を取り上げる。</p> <p>◇生徒の実態に応じて、5・7のリズムに注意して音読するよう促す。 書き言葉</p> <p>◇「裾に泣きつく子ら」に注目させながら、どのような場面か考えるよう促す。 日本手話</p> <p>◇生徒の発言を適宜板書する。</p> <p>◇生徒の実態に応じて、5・7のリズムに注意して音読するよう促す。 書き言葉</p> <p>◇「悪しけ人」に注目させながら大君について考えさせる。 日本手話</p> <p>◇生徒の発言を適宜板書する。</p> <p>◇(4)の和歌だけ意味合いが違うことを伝える。</p>	
	<p>防人歌に書かれた思いを読み取る (15分)</p>	<p>(1)~(3) ・家族に会いたい (家族愛) ・故郷に帰りたい</p> <p>(4)・大君への怒り、不満</p> <p>・教員の説明を聞き、いろいろな見方があることを知る。</p>	<p>○生徒の考えを交流させ、防人歌に込められた思いを確認する。</p> <p>○防人歌が現在まで語り継がれてきた歴史や指導者の考えについて説明しながら話し合いで出てきた意見で不十分な点について補足する。</p>	<p>◇友達の見解について話し合い、全体で交流しながら、互いの意見や考えを伝え合わせ、深めていくように促す。 日本手話</p> <p>■現代との相違点 (所要時間や危険) や共通点 (家族への思い) について理解し、発言しようとしている。</p>
<p>まとめ (5分)</p>		<p>○ノートに板書を書き写し、感想を書く。</p>	<p>○板書の視写と感想の記入を指示する。</p>	<p>※時間があれば感想を発表させる。</p>

8 意図的に使用する手話単語
・和歌 ・古典 ・係り結び

聾学校で使われてきた記号の例

記号	意味	例
▽ ○	「問」「答」	▽ 今日は、何曜日ですか。○ 月曜日です。
～	～から・・・まで	東京から大阪まで → 「東～大」 5から15まで → 「5～15」
△	もし、例えば、仮に	△ お母さんが病気です。 (もし、お母さんが、病気になったら。) △ お金を拾った。 (例えば、お金を拾ったら。)
= ㇀	同じ	㇀ おいで ㇀ 1 m ㇀ きなさい ㇀ 100 cm ㇀ こい ㇀ いらっしやい
㇁	同じではない	㇁ 花 ㇁ まと ㇁ 乱暴 ㇁ 鼻 ㇁ まど ㇁ 勇気
㇂	反対	㇂ 重い ㇂ 男 ㇂ 軽い ㇂ 女
㇃	対応語	㇃ 鉛筆 ㇃ ノート
㇄	上位概念 下位概念	あいさつ { こんにちは おはよう ただいま おやすみ } くだもの { バナナ りんご みかん }
_____。	省略	明日は、_____。 ごはんを _____。 _____、土曜日です。
㇅	関係あり	㇅ ガラスを割った。
㇆	関係なし	㇆ 太郎 花子 ×
㇇	能動と受動	㇇ 怒りました。 怒られました。
㇈	似ているが、いずれか一方の表現が良い	㇈ 飛行機を見に行った。 飛行場を見学に行った。

解説

日本手話を活用して指導する際には、事前に正しい手話表現について、ろう教員に確認したり、手話辞典で確認したりするなどの準備が必要です。

事例3

音声の主たるコミュニケーション手段にしている児童と日本手話を主たるコミュニケーション手段にしている児童が、視覚的に分かりやすい教材の活用や話題の焦点化などの工夫によって、互いの考えや気付いたことについて積極的に伝え合い、互いの考えを深めることができた事例

C聾学校小学部第5学年 理科学習指導案

1 単元名 雲と天気の変化 (啓林館 わくわく理科5)

2 単元について

第4学年「B(3) 天気の様子」で学習した基礎的事項を踏まえつつ、児童が本単元を通して、雲の様子を観察し天気がどのように変化していくのか、きまりがあることなどに気付かせ、児童が気象現象により一層興味・関心をもち、気象情報を自らの生活に積極的に取り入れようとする態度を育てたいと考えている。

また、テレビや新聞、インターネットから収集した情報を活用する能力や防災意識を高めることにもつなげていきたいと考えている。

3 児童の実態

(1) 学級の実態

本学級には、男児2名(以下A児、B児とする)、女児1名(以下C児とする)の計3名の児童が在籍している。A児とB児は、人工内耳を装用しており、日常的に聴覚を活用している。また、2名のみで授業を行う国語や算数においては音声を主たるコミュニケーション手段としながら授業を進めている。C児はデフファミリーで育っており、両耳に補聴器を装用し、日本手話が主たるコミュニケーション手段である。自分の思いを日本手話で表現することはできるが、音声中心のやりとりでは、十分に理解することはできない。

このような児童の実態を踏まえ、国語と算数については、主たるコミュニケーション手段に応じた学習グループを編制し指導を行っている。

また、理科などの視覚的な手がかりが比較的多い教科や行事などについては、合同による学習グループを設定し、視覚的な教材等を活用した授業を行い、その視覚的な教材を手がかりとし、児童同士が手話を活用して互いに伝え合う場面を意図的に設定することによって、児童が互いの意見について伝え合ったり、考えを深め合ったりすることができ、言語活動を充実させることができるものと考えている。

なお、合同の授業の際には、「どのような内容について伝え合わせるか」「何を手がかりに伝え合わせるか」「十分伝え合えない場合はどのような支援を行うか」などについて、事前に十分検討を加えるようにしている。

(2) 児童の実態

障	学習に関わる実態	コミュニケーションに関わる実態
A	<ul style="list-style-type: none"> 教科書を読み、初読で大まかな内容を捉えることができる。 学習内容を自らの生活と関連付けて考えようとすることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 音声を中心のコミュニケーションを行っているが、手話を活用してコミュニケーションを行うこともできる。 相手に伝わるように表現を工夫することは難しい。
B	<ul style="list-style-type: none"> 教科書の文章に記載されている単語の意味理解が不十分なことが多い。 掲載されている「図」から、どのようなことを示しているのか大まかに捉えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 普段の生活では、音声を中心にコミュニケーションを行っている。 C児に対しては、手話付きスピーチで伝えようとすることができる。
C	<ul style="list-style-type: none"> 教科書に記載されている多くの単語の意味を捉えることが難しい。 教科書の記載内容を指導者が日本手話に置き換えて表現すると理解することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> 手話の語いが豊富である。 補聴器を装用しているが、音声を聞いて内容を理解することは難しい。

4 単元の目標

(1) 雲の量や動きを観察し、天気の変化を調べ、天気はおおよそ西から東へ変化していくという規則性があることを理解することができる。

(2) 天気は西から東へ変化していくという規則性を踏まえ、気象情報を聞いて天気の変化を予想することができる。

POINT

児童が自分の考えを互いに伝え合い、考えを深めていくことは、言語活動の充実につながる大切な活動です。しかし、主たるコミュニケーション手段が違う児童が十分に伝え合うためには、

- ・児童が互いの表現を理解できるよう普段の生活の中で、互いに伝え合う経験を繰り返す
- ・話し合う事項や内容について、児童が明確に理解できるよう、教材や授業展開の仕方を工夫することが大切です。

使用する教材は、視覚的な手がかりとして必要な情報が含まれるものであることが大切であるとともに、使用のねらいによっては、時には情報量を制限することも必要です。例えば、写真は正確な情報を伝えることができるという特徴をもっていますが、時には、不必要な情報も含まれているため、意図が正確に児童に伝わらない場合もあることに留意する必要があります。場合によっては、使用する教材を写真ではなく、イラストにする工夫を加えることも有効です。

また、話し合いを行う際には、それぞれの児童が「何について話し合うのか」について共通に理解していることが必要です。そのためには、話題を焦点化するとともに、児童の発言を全体化（意図的に児童の発言を取り上げたり、板書・板画して理解を促したりしながら、すべての児童がその話題に対して意識するよう働きかける）するよう展開を工夫したり、伝え方を工夫するよう児童に指導したりすることが大切です。

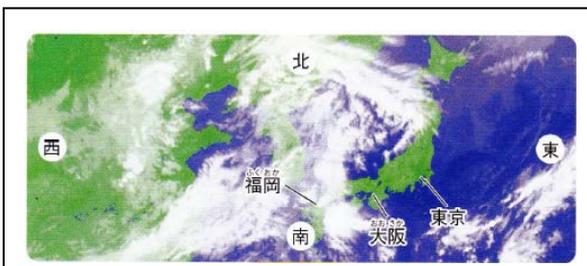
解説

児童の実態によっては、教科書に掲載されている「人工衛星による雲画像」ではなく、指導者がより雲の分布の特徴について強調したイラストを作成し使用することによって、児童が何について考えれば良いかを焦点化することができます。また、雲の分布の変化について、それぞれの児童の考えを互いに伝える際にも伝えやすくなります。

ただし、イラストを用いる際には、写真とイラストを対応させたり、写真の特徴とイラストの特徴について確認したりするなどしながら、最終的には教科書の記載が理解できるよう留意する必要があります。

視覚的に理解を促す教材の工夫例

人工衛星による雲画像（教科書）



教材として用いたイラスト（例）



5 指導計画 (全10時間)

- ①空を見上げて、雲の様子を観察する。
- ②雲の様子から天気はどのように変わるのか考える。
- ③雲の量や動きと天気の変化の関係をまとめる。
- ④雲の種類と天気の変化の関係を考える。
- ⑤インターネットを活用し、数日間の天気の変化について調べる。(2時間)
- ⑥気象情報をまとめた結果から、天気の変化にはどのような規則性があるか考える。[本時]
- ⑦天気の変化を予想するための情報を集め、天気との関わりを調べる。
- ⑧まとめのプリント
- ⑨筆記テスト

6 評価規準

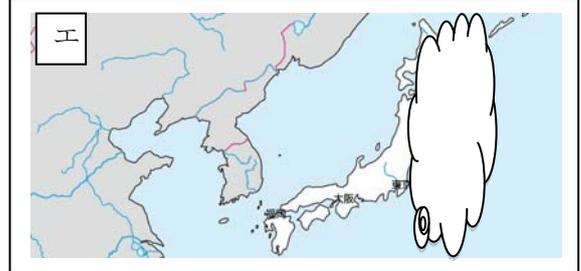
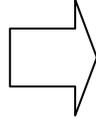
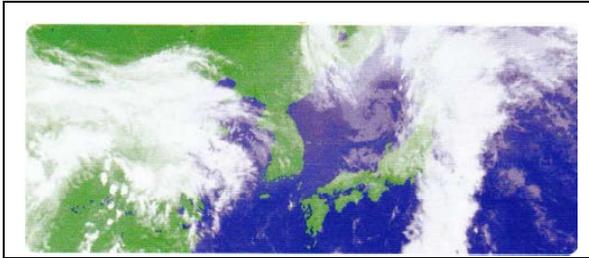
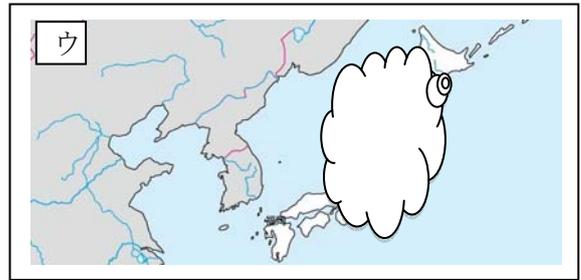
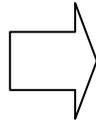
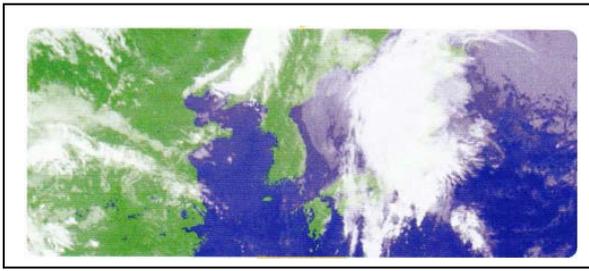
- ・雲の様子や気象情報を基にした天気のを日常生活で活用しようとしている。【自然事象への関心・意欲・態度】
- ・天気の変化と雲の量や動きなどを関連付けて考察し、自分の考えを表現している。【科学的な思考・表現】
- ・雲の様子を観察するなど天気の変化を調べる工夫をし、気象衛星やインターネットなどを活用して計画的に情報を収集している。【観察・実験の技能】
- ・雲の量や動きは、天気の変化と関係があることについて理解している。【自然事象についての知識・理解】

7 本時の目標

- ・気象情報をまとめた結果から、天気の変化には規則性があると考え、自分の考えを表現することができる。
- ・天気は、およそ西から東へ変化していくことを理解することができる。

8 本時の展開

過程	○主な学習活動 ・予想される児童の発言等	◎指導者の主な働きかけ	・コミュニケーションに係る配慮事項	△留意事項 ■評価規準 □評価方法
導入	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block;"> 学習課題の提示 「雲の動きと天気の変化」 天気は、どのように変化していくのだろうか。 </div>			
	○ワークシートに保存してあった4枚の雲画像を時系列となるように貼る。	◎前時に用意したイラストカードを用意するように促す。 ◎イラストカードを時系列に並べかえ、ワークシートに貼るように伝える。	・学習課題は、文字カードにしておき、児童に提示するとともに、音声及び日本手話で読み上げ、児童が学習課題を十分理解するよう留意する。	△前時に、雲画像と、情報量を精査し雲の量や位置などを明確に示したイラストカードとを対応させておく。 ※イラストカードとワークシートを用意しておく。
展開	○イラストカードを黒板に貼ったり、指さしをしたりしながら、ワークシートに貼った順やその理由について友達に伝える。	◎各児童にワークシートに貼った順とその理由について発表するように促す。 ◎その都度、音声や手話を活用しながら、児童の考えを確認し、板書する。 ◎児童の発言に対するコメントを加えながら、児童が互いの考えや気付きに興味をもつよう働きかける。	・イラストカードの順番と理由について発表する際には、他の児童にも見えるようにイラストカードを拡大したものを示しながら発表させる。 ・普段から、学級でおこったトラブルやハプニングなどについて伝え合い、解決していく機会をもつように配慮し、互いの考えや意見に対して興味を示すよう学級経営を行う。	△イラストカードには、それぞれ「ア」「イ」「ウ」「エ」と記号を記入しておく。 △福岡・大阪・東京の3都市の位置関係を確認する。 △児童の発表したイラストカードの順やその理由について板書しておく。 ※板書の際には、児童の発言を基にして、「東」「西」「変化」などの言葉を意図的に使用して書き言葉に置き換える。



使用したワークシートの例

「雲の動きと天気の変化」
天気は、どのように変化していくのだろうか。

イラスト	雲画像
↓	↓
↓	↓
↓	↓
(まとめ) _____	

本時の展開では、この部分にイラストを貼るように指示をしました。

板書（学習課題）と文言を対応させ、課題が明確に伝わるように工夫しました。

教科書の雲画像とイラストが正確に対応しているか確かめるため、雲画像を天気の変化の順に貼る宿題を出しました。

展開の「終末」時に、児童が理解した学習内容を「雲は西から東へ動き、天気も西から東へ変化する。」と、正しい書き言葉で確認しました。

解説

学級において、トラブルやハプニングなどについて日頃から児童同士が伝え合い、互いの思いや考えについて理解し合う経験を重ねながら、互いの考え方や人格を認め合うよう学級経営を行うことが、児童の人格形成を促す上で大変重要です。

また、互いを認め合いつつ、自分の考えやその根拠について相手が理解するよう伝えようとしたり、伝え方を工夫したりすることを促すことは、児童が「論理的に思考し表現する能力」や「互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力」を育成することにも結び付きます。

	<p>・雲は、西から東へ動いている。 (CLを活用して手話表現も行う。)</p> <p>○雲の変化と気象情報を関連付け、天気の変化の規則性について考察する。</p> <p>・雲が動いたら、雨が降っているところも動いている。</p> <p>・雲がないところは、晴れている。</p> <p>・雲は西から東へ動くから、天気も西から東へ変化する。</p>	<p>・児童の意見を整理する。</p> <p>「雲の動きには、どのようなきまりがありますか。」 「pt-図／4／つまり／雲／動く／時／約束／何」</p> <p>◎福岡・大阪・東京の天気変化と、雲画像、アメダスの情報とを比較するように促す。</p>	<p>・「東」「西」「変化」などの言葉や手話単語を確認し、これらの言葉を使用した表現を促す。</p> <p>・CLを活用し、雲と日本列島の位置関係や、雲の動きが伝わりやすいよう、適宜適切な手話表現に置き換える。</p> <p>・日本手話を活用した伝わりやすい表現となるよう、適宜適切な表現について見本を見せる。</p>	<p>△拡大したイラストカードを黒板に貼りながら、雲の動きを確認する。</p> <p>■天気は西から東へ変化していく規則性があることを捉えているか。</p> <p>□児童に日本手話表現を促し、理解しているかどうかについて確認する。</p> <p>△雲がかかっているところは曇りや雨になることを確認する。</p> <p>■天気の変化を雲の動きと関連付けて説明することができたか。</p>
<p>終末</p>	<p>○板書を視写する。</p> <p>○ワークシートに記入する。</p>	<p>○板書する。</p> <p>「雲は西から東へ動き、天気も西から東へ変化する。」</p> <p>○台風の時には当てはまらないことを補足する。</p> <p>○ワークシートにまとめるよう促す。</p>	<p>・正しく書けているか確認し、誤って書いている時には、正しい表記を確かめるよう促す。</p>	

トピックス等における話し合いの進め方の例

1 話題の選択

- ・児童の課題や興味などに応じて話題を選択する。
- ・児童の実態を踏まえ、話し合わせたい話題を選択する。

2 話題の全体化・焦点化

- ・その場の児童全員が何について話し合うか理解できるよう、板書・板画・その他手がかりとなる教材を用意し、全体化（その場にいる児童全員に話題を意識化）する。
- ・話題が広がりすぎないように、事前に話題を焦点化して話し合うよう促す。

3 話題の展開

- ・児童同士が十分伝え合えるよう余裕をもった時間設定を行う。
- ・誰からどのような発言があったか後で確認できるよう板書するなどして記録化しておく。

4 話題の整理

- ・最終的な結論を確認する。
- ・正しい日本語（書き言葉）で整理する。

解説

日本手話は写像性がある言語であるため、日本手話を活用することによって、児童の伝えたい内容を相手に効果的に伝えることができます。本事例では、雲が西から東へ移動しているという天候の変化について日本手話を活用して表現することによって、相手に意図を正確に伝えることができました。しかし、日本手話による理解に留まらず、指導者は児童が日本手話で理解できたことについて正しい日本語（書き言葉）としても理解できるよう、指導を行うことが大切です。特に、教科書本文の記述や記載された内容についても正しく理解できるよう、理解した内容と書き言葉とを関連付けたり対応させたりする指導を意図的に行えるよう計画的に指導を行う必要があります。

日本手話の理解と日本語の理解の関連（例）

本時の評価

雲はおよそ西から東へ動き、天気もおよそ西から東へ変化していくという規則性があることが分かる。

「規則性があることがわかる」ために必要な児童の理解

事象や内容の理解

- ・雲が西から東に移動していることがわかる。
- ・天気の変化の規則性を理解して天気予報をさいたり読みだりすることができる。

日本語の理解

- ・教科書の記述「雲がおおよそ西から東へ動いていくので、天気も、およそ西から東へ変化していくことがわかる」を読み、意味が理解できる。
- ・学習した内容を正しい日本語「雲は西から東へ動き、天気も西から東へ変化する。」と書くことができる。

事例4

単元指導計画の作成に当たって、他の単元等との相互の関連性を踏まえた指導計画の作成に努めるとともに、事前に生徒の実態を踏まえた評価規準について検討したことによって、日本手話による生徒一人一人に応じた働きかけを適切に行うことができた事例

D聾学校中学部第3学年理科学習指導案

1 単元名 [物質] 化学変化とイオン 第2章 酸・アルカリと塩
(啓林館 理科「未来へ広がるサイエンス」3年)

2 単元の目標と評価規準

(1) 単元の目標

水溶液の電気伝導性や電気分解の実験を行い、その実験結果から、イオンの概念を形成させる。また、電池、酸・アルカリの性質や中和の実験の結果をイオンのモデルと結び付けて考えることができる科学的思考力を身に付けさせる。

(2) 評価規準について

本校中学部では、各教科の単元ごとに、観点別学習状況に照らし合わせた評価規準を設定している。理科では、この単元において、次のとおり評価規準を設けている。

	自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての 知識・理解
十分満足	酸性・アルカリ性の水溶液の性質や、うすい塩酸にうすい水酸化ナトリウム水溶液を加えたときの水溶液の性質の変化を意欲的に、科学的に調べようとするとともに、事象を日常生活と適切に関連づけて積極的に考察しようとする。	酸性・アルカリ性の水溶液に関する事象や、酸とアルカリの反応に関する事象のなかに課題を見だし、目的意識をもつて的確に調べるとともに、結果を適切に分析して解釈し、自らの見解を分かりやすく科学的に表現している。	酸性やアルカリ性の水溶液の性質や、うすい塩酸にうすい水酸化ナトリウム水溶液を加えたときの水溶液の性質の変化についての実験の基本操作を的確に習得するとともに、結果を正確に記録して分かりやすく整理するなど、実験の基礎技能を確実に身に付けている。	酸性の水溶液に共通の性質およびアルカリ性の水溶液に共通の性質、酸、アルカリ、pH、指示薬の色の変化、中和、イオンのモデル、塩などについてよく理解し、知識を確実に身に付けている。
概ね満足	酸性・アルカリ性の水溶液の性質や、うすい塩酸にうすい水酸化ナトリウム水溶液を加えたときの水溶液の性質の変化を調べようとするとともに、事象を日常生活と適切に関連付けて考察しようとする。	酸性・アルカリ性の水溶液に関する事象や、酸とアルカリの反応に関する事象のなかに課題を見だし、目的意識をもって調べるとともに、結果を分析して解釈し、自らの見解を表現している。	酸性やアルカリ性の水溶液の性質や、うすい塩酸にうすい水酸化ナトリウム水溶液を加えたときの水溶液の性質の変化についての実験の基本操作を習得するとともに、結果を正確に記録して整理するなど、実験の基礎技能を身に付けている。	酸性の水溶液に共通の性質およびアルカリ性の水溶液に共通の性質、酸、アルカリ、pH、指示薬の色の変化、中和、イオンのモデル、塩などについて理解し、知識を身に付けている。

理科における「関心・意欲・態度」については、昨年度より引き続き課題の提出回数・忘れ物・授業中の学習状況・長期休業中の課題達成状況・ノート提出という項目を設定し、学習中の取組の様子を踏まえ、減点法による評価を行っている。「思考・表現」については、観察・実験の結果を整理して考察したり、指導者の問いかけに対し、科学的な概念を使用して考えたりしているかどうか観察法による評価を行っている。「観察・実験の技能」については、例えば観察や実験の際に安全に正しく操作しているかどうか行動観察による評価を行っている。「知識・理解」では、単元テストや定期テストによる基礎学力の定着度や年間6回行われる学力テストなどによる評価を行っている。

これらの結果から、観点毎の達成率を数値化し、評価補助簿の中で評価・評定の規準として示すことができるようにしている。理科では、3段階（Aは大変満足、Bは概ね満足、Cは不十分）で評価・評定の規準としている。

POINT

聾学校における教育は、小・中学校の教育内容と同一の内容について指導を行う、いわゆる「準ずる教育」が基本となります。指導に際しては、小・中学校の指導内容や前単元の指導内容との関連などについて十分留意しながら、教科の目標が達成されるよう綿密に指導計画を作成する必要があります。そのためには、指導者は、単元相互の関連や他学年の学習内容との関連について、きめ細かな教材研究を行うことが大切です。

そして、生徒の実態に応じた言葉かけや働きかけを適切に行うためには、

- ・評価規準を事前に検討する
- ・生徒の実態に応じた評価を適宜行う
- ・理解が不十分な際にどのように働きかけるかについても、事前に検討しておくことが大切です。

また、客観性のある評価に努めることも重要です。年間を通じて観点別の評価規準とともに、それぞれの観点に応じた評価方法について検討し、担当者が変わっても継続性をもち、同じ規準で評価を行えるよう、学部の指導者間等で共通理解を図っておくことが大切です。

本事例（理科）における評価方法例

（年間を通した評価規準）

関心・意欲・態度

- ・課題の提出回数
- ・忘れ物
- ・授業中の学習状況
- ・長期休業中の課題達成状況やノートの提出

思考・表現

- ・観察法による評価

観察・実験の技能

- ・行動観察による評価

知識・理解

- ・単元テストや定期テストによる評価
- ・学力テストによる評価

（単元における評価規準）

十分満足

単元の目標が十分達成されたと考えられる規準

概ね満足

単元の目標が概ね達成されたと考えられる規準

3 生徒について

本クラスは日本手話クラスであり、6名の生徒が在籍している。6名の生徒は、全員、学習意欲が高く、主体的に学習に参加している。これまでの学習場面において、例えば、酸性やアルカリ性に共通する性質を調べる実験では、酸性やアルカリ性に共通する性質について目的意識をもって正しく実験を行っていたり、電池のしくみに関する学習では、指導者による説明や発問を意欲的に聞き取り、発表し、互いの意見から積極的に話し合ったりしている様子が見られていた。

学力については、個人差が大きいものの、生活のさまざまな場面において、手話を用いて自分の考えを述べたり、考えられることを自分の言葉で表現したりすることができる。

指導者としては、より生徒の理解を促し、積極的な生徒の授業への参加を促すことができるよう、特に抽象的な事象を多く含む内容を説明する際には、アニメーションによるスライド資料を提示したり視覚的な教材を工夫したりするなどしている。理科の学習を通して、自然の事物・現象に進んでかかわり、目的意識をもって観察、実験などを行い、科学的に探究する能力の基礎と態度を育てるとともに、自然の事物・現象についての理解を深め、科学的な見方や考え方を養いたいと考えている。そして、生徒同士が学習活動のなかで、互いにいろいろな考えを出し合い、話し合いながら、理科がとてもおもしろいと感じられる授業をつくっていききたいと考えている。

4 指導計画（12時間計画） ※教科書の第2章のみを抜粋 [本時8/12]

<1次 つかむ…2時間>			
時間	学習活動	留意事項	評価
1 2	・リトマス紙の色の変化以外に、酸性またはアルカリ性の水溶液に共通する性質はないかについて話し合い、酸性またはアルカリ性の水溶液に共通する性質について実験を通して考える。	・酸性やアルカリ性の水溶液の取扱いに注意させ、安全眼鏡を着用させる。 ・グループをつくり、協力しながら、安全に実験を行うよう指導する。	・身のまわりの酸性やアルカリ性の水溶液に興味を示し、正しく、安全に実験を行うことができる。
<2次 ふかめる…9時間>			
時間	学習活動	留意事項	評価
3	・実験結果から考察し、酸性およびアルカリ性の水溶液に共通した性質を見付ける。	・前時のノート振り返りながら、実験内容を想起させる。	・実験結果から酸性やアルカリ性の水溶液に共通した性質を理解することができる。
4 5	・イオン式を使いながら、酸性やアルカリ性の水溶液の性質について考える。 ・酸性の水溶液の共通した性質を示すものは水素イオンであり、アルカリ性の水溶液の共通した性質のものが水酸化物イオンであることに気付く。 ・塩酸や酢酸では酸性の強さが、水酸化ナトリウムとアンモニア水ではアルカリ性の強さが、それぞれ異なることについて演示実験を通して気付かせるよう働きかけを行う。pH試験紙を用いながらpHの値を示し、酸性、中性、アルカリ性に分類できることを説明する。	・生徒の理解の状況を細かく把握しながら、適切な言葉かけを行う。 ・水素イオンが陰極に、水酸化物イオンが陽イオンに移動する様子を、アニメーションを使ったスライド資料で説明する。 ・安全に配慮した授業展開に心かけ、酸性やアルカリ性の水溶液の取扱い十分注意させる。	・酸性やアルカリ性の水溶液に共通の性質があることに興味を示し、酸性やアルカリ性の水溶液の性質のものが、水素イオンと水酸化物イオンであることを考察し、理解することができる。 ・pH7が中性で、7より小さいほど酸性が強く、7より大きいほどアルカリ性が強いことを理解している。
6	・酸と金属の反応で水素が発生するのは、酸にふくまれていた水素イオンが変化したものであることに気付く。	・前回の実験で酸性の水溶液にマグネシウムリボンを入れたときに、変化が起こっていることを想起させる。	・酸と金属の反応で水素が発生することに興味を示し、すすんで理由を考え、理解することができる。

7 8 9	<ul style="list-style-type: none"> 水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を加えたときにできる物質が何か予想させ、実験を行う。 実験結果から酸の水溶液とアルカリの水溶液を混ぜると中和反応により塩と水が生成することを見いだす。 	<ul style="list-style-type: none"> 安全に実験できるよう、酸性やアルカリ性の水溶液の取り扱いに注意させ、安全眼鏡を着用させる。 グループをつくり、協力しながら安全に実験を行うよう指導する。 前回の実験内容が想起できるようノートの取り方を注意させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 酸とアルカリの反応に興味を示し、進んでその変化を調べ、中和により塩と水ができることを理解することができる。 こまごめピペットの使い方に慣れ、中和による塩の生成実験を、正しく安全に行うことができる。
10 11	<ul style="list-style-type: none"> 酸やアルカリの物質を使用した実験では、酸性やアルカリ性の廃液が残ることに気付き、どのような処理をすればよいかについて考える。(水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を加えていったときの実験の様子を、イオンのモデルで考える。) 水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を少しずつ加えたとき、中性付近でpHが大きく変化することに気付く。中和によりできるだけpH7に近い状態で廃棄するとよいことがわかる。 	<ul style="list-style-type: none"> イオンのモデルを使い、グループで話し合いながら考え合わせる。 	<ul style="list-style-type: none"> 酸とアルカリの反応が、イオンのモデルで表すことができることに興味を示す。 イオンのモデルを使って中和を考察することができる。 中和と中性の違いについて理解している。 身の回りの生活のなかの「中和」について考えることができる。
＜3次 まとめる…1時間＞			
時間	学習活動	留意事項	評価
12	・単元テスト	・適性に試験を進行するため、教室内の環境整備に配慮する。	・理科の評価規準に基づき評価を実施する。

5 本時の目標

- こまごめピペットを安全に注意して使い、実験を正しく安全に行うことができる。(観察・実験の技能)
- 中和によってできた塩の種類について、その形から推測し、説明することができる。(科学的な思考・表現)

6 本時の展開

過程	学習活動・学習内容	指導上の留意点
導入	<p>発問 水酸化ナトリウム水溶液と塩酸を混ぜてできた物質は何か、結晶の形から考えよう。</p> <p><u>学習課題を捉える。</u> 水酸化ナトリウムと塩酸が反応するとどのような物質ができるかについて予想する。</p> <p>説明1 実験方法と注意することについて確認します。</p> <p><u>実験方法及び注意点について確認する。</u> こまごめピペットの使い方について再確認する。</p>	<p>目標時間を指示する。 生徒から十分な考えが出てこなくても、時間を目途に中断する。 ◎生徒一人一人が課題を理解しているか確認する。</p> <p>前時に説明した実験方法やこまごめピペットの使い方について、ポイントを確認する。 塩酸は、少量ずつ入れていくよう注意させる。 水酸化ナトリウム水溶液や塩酸の危険性や取り扱いについて注意を促し、安全眼鏡をかける理由を確認する。 協力して実験を進めるよう指示する。</p>

解説

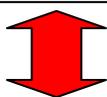
本時は、「こまごめピペットを注意して使い、実験を正しく安全に行うことができる。」ことを目標としていますが、この目標を達成するためには、生徒が学習内容について段階を踏んで理解していることが重要になります。

本単元において、生徒は5時目にpHについて学習し、その際に酸性雨の危険性について理解しています。強酸性や強アルカリ性の危険性について、生活経験や既習事項などと関連付けながら理解することによって、より一層こまごめピペットの安全な使い方などについて理解を促すことができます。

指導計画を作成するに際しては、前後の指導内容や他の単元、他の教科の学習内容等との関連性についても留意することが大切です。

他の学習内容等との関連性について（本時の例）

単元における他の学習内容との関連



本時の目標



他の単元との関連

他学年の学習内容との関連

他の教科の学習内容との関連

・pH7が中性で、pH7より小さいほど酸性が強く、pH7より大きいほどアルカリ性が強いことを理解している。

・こまごめピペットを注意して使い、実験を正しく安全に行うことができる。

- ・水溶液の性質について理解している。(小学校第5学年)
- ・酸性・アルカリ性・中性の性質について理解している。アルミニウムが塩酸に溶けることを知っている。(小学校第6学年)
- ・地球環境や日本の自然環境などに対して関心がある。(小学校第6学年)

解説

指導者と生徒の間で正確に伝え合ったり、生徒同士が十分伝え合ったりすることが可能な実態である場合は、指導者の指示や説明の時間と実験や作業の時間、生徒同士が伝え合い考えを深める時間など、生徒に見通しをもたせながら授業を展開することにより、より一層生徒の主体的な授業への参加を促すことができます。

本事例の場合は、指導者は、まず生徒が指導者の発問を理解できているか確認し、生徒全員が課題意識をもって授業に参加するように留意しました。そして、その上で、実験の手順や目標時間などについて説明を行うとともに、グループを編制した上で何について話し合うのか明確に指示を出しました。話し合った内容は、ワークシートに端的に整理できるように工夫し、グループごとの考察やその根拠について話し合う時間を確保しました。話し合いは、それぞれの生徒が自分の伝えたいことや考えていることを一番表現することのできる手段である日本手話で行いました。そして、最後にまとめる際には、教科書本文の記述内容を参考にしながら、「①水酸化ナトリウム水溶液と塩酸から、塩(塩化ナトリウム)ができた。」②塩酸によって、水酸化ナトリウムのアルカリ性が打ち消された。」と、書き言葉で整理しました。②については、次時に扱う内容である「中和」の概念につなげられるよう実験結果から理解した学習内容を「打ち消す」という日本語で意図的に押さえました。

<p>展 開</p>	<p>指示1 ①安全に注意してグループで実験を行う。 ②結果を確認し、出来た物質が何かについて話し合う。 ③結果と話し合った内容をワークシートに書く。</p> <p><u>指示に従って実験する。</u> 水酸化ナトリウム水溶液に塩酸を少量ずつ加え、溶液を中性または弱酸性にする。(観察・実験の技能) 中性または弱酸性になった溶液の水分の一部をスライドガラスにとって蒸発させ、残った物質を顕微鏡で観察し、記録する。(観察・実験の技能) グループで結果をまとめ、話し合いながら考察し、ワークシートに記述する。(科学的な思考・表現)</p>	<p>※実験中は、指示内容を黒板に提示しておき、生徒が適宜確認できるようにしておく。</p> <p>目標時間を指示する。</p> <p>ドライヤーの取扱いに注意させる。 【評価】こまごめピペットの使い方に慣れ、中和によって塩ができることを調べる実験を、正しく安全に行うことができたか。(観察・実験の技能)</p> <table border="1" data-bbox="858 521 1442 645"> <tr> <td>十分満足</td> <td>こまごめピペットの使い方を理解しており、実験を正しく安全に行うことができる。</td> </tr> <tr> <td>概ね満足</td> <td>こまごめピペットを注意して扱おうとすることができる。</td> </tr> </table> <p>生徒同士が日本手話を活用して伝え合いながら、考えを深めていけるよう、適宜言葉かけを行う。</p>	十分満足	こまごめピペットの使い方を理解しており、実験を正しく安全に行うことができる。	概ね満足	こまごめピペットを注意して扱おうとすることができる。
十分満足	こまごめピペットの使い方を理解しており、実験を正しく安全に行うことができる。					
概ね満足	こまごめピペットを注意して扱おうとすることができる。					
<p>ま と め</p>	<p>指示2 考察結果についてグループごとに発表をお願いします。</p> <p><u>グループごとに考察した内容について発表する。</u> 他のグループ発表を聞いて疑問に思ったことを質問したり、意見を述べたりする。(科学的な思考・表現)</p> <p><u>板書をワークシートに視写する。</u> <u>考察結果について、日本手話で話し合う。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> グループの実験結果について、板書を踏まえて再度発表する。 他のグループから出た質問や意見に答える。 <p><u>実験結果をまとめる。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> 発表した内容などについて、「打ち消された」という言葉を使用しながらワークシートに記入する。 例「塩酸の酸性によって、水酸化ナトリウムのアルカリ性が打ち消され、塩化ナトリウムができた。」 予告した「中和」という言葉をメモする。 <p>おわりのあいさつをする。</p>	<p>実物投影機を活用して生徒のワークシートを拡大して提示する。 自分のグループの考察内容との相違点などについて発言するように促しながら、より生徒が考えを深めていけるよう留意して授業を進める。 【評価】中和によってできた塩の種類を、その形から類推し、説明することができたか。(科学的な思考・表現)</p> <table border="1" data-bbox="858 1111 1442 1263"> <tr> <td>十分満足</td> <td>実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などを根拠としながら説明できる。</td> </tr> <tr> <td>概ね満足</td> <td>実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などをもとにして推測できる。</td> </tr> </table> <p>発表の結果や質疑内容を確認し、以下のように板書する。(板書内容を日本手話でも表現する。)</p> <p>ワークシートに板書を視写するよう伝える。 板書を踏まえ、それぞれのグループの結果について話し合うよう伝える。 グループで話し合った内容をワークシートに記述するよう伝える。その際に「打ち消された」という言葉を使用することを伝える。 酸性とアルカリ性が互いの性質を打ち消し合うことを「中和」ということを伝え、次時は、「中和」について学習することを予告する。</p>	十分満足	実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などを根拠としながら説明できる。	概ね満足	実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などをもとにして推測できる。
十分満足	実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などを根拠としながら説明できる。					
概ね満足	実験結果を踏まえ、中和によってできた塩の種類について、結晶形などをもとにして推測できる。					

本時における授業展開の方法（例）

